

# 戦後スターリン期における独ソ戦の記憶

—— レニングラード防衛博物館に着目して ——

松 本 祐生子

## はじめに

独ソ戦をめぐるソ連の記念事業において、博物館は「記憶の場」であった<sup>(1)</sup>。1943年以降、戦況が回復すると、ソ連の各都市で独ソ戦を記念する博物館を建設する動きが始まった。その中で、包囲戦で多大な戦禍を被ったレニングラードでは、1944年に展覧会「レニングラードの英雄的な防衛」が始まった。この展覧会は、1946年1月にレニングラード包囲解放2周年を記念してレニングラード防衛博物館に改組された。場所は、フォンタンカの左岸、夏の庭園に面するソリャノイ・ガラドクという、レニングラードの中心部であった<sup>(2)</sup>。防衛博物館は、戦争記念碑や修復された建造物と同様に、包囲を記念する空間の一つであり、展示事業を中心に巡礼の場、学習の場、プロパガンダの場へと発展したと考えられている<sup>(3)</sup>。

しかしながら、防衛博物館は、党から政治的な圧力がくわえられた結果、1949年に閉鎖され1953年に解体された。この閉鎖には、レニングラード特有の事情があった。包囲解放の直後から、レニングラードでは、当局が市民と都市に対して戦時の功績を称えるとともに、飢餓に苦しんだ包囲下の状況を隠蔽した<sup>(4)</sup>。そして、1949年から1950年代初頭にかけて、レニングラードの政治指導者が多数弾圧される「レニングラード事件」が発生して、包囲の

- 
- 1 博物館における市民的機能と儀礼的側面については以下を参照。Пружинин Б.И., Богданов С.И., Василевич Н.Б., Васинева П.А., Грякалов А.А., Игнатъев Д.Ю., Исупов К.Г., Козмин В.Ю., Корольков А.А., Летягин Л.Н., Ляшко А. В., Мартынова С.А., Монахов В.М., Никифорова Л.В., Степанова А.С., Цветкова Л.А., Шоломова Т.В., Шедрина Т.Г., Антропология музея : к концептосфера идей, исторического диалога и сохранения ценностных констант (материалы «круглого стола») // Вопросы философии. 2019. № 5. С. 11. 独ソ戦の記憶に関する日本語の研究は、国家の取り組みと歴史家の活動を中心に論じてきた。以下を参照。立石洋子『国民統合と歴史学：スターリン期ソ連における『国民史』論争』学術出版会、2011年、26–27頁；橋本伸也「歴史と記憶の政治：エストニアの事例を中心に」塩川伸明、小松久男、沼野充義編『ユーラシア世界3 記憶とユートピア』東京大学出版会、2012年、127–155頁。
  - 2 СОЛЯНОЙ ГОРОДОК // Белова Л.Н., Пиотровский Б.Б. (глав. ред.) Санкт-Петербург, Петроград, Ленинград: энциклопедический справочник. М., 1992. С. 586.
  - 3 Steven Maddox, *Saving Stalin's imperial city: historic preservation in Leningrad, 1930–1950*, (Bloomington: Indiana University Press, 2014), pp. 163–169; Steven Maddox, “Healing the Wounds: Commemorations, Myths, and the Restoration of Leningrad’s Imperial Heritage, 1941–1950,” (Ph.D. diss., University of Toronto, 2008), pp. 178–179.
  - 4 マイケル・ジョーンズ（松本幸重訳）『レニングラード封鎖：飢餓と非情の都市 1941–44』白水社、2013年、406–407頁。

経験に関する調査が中断された<sup>(5)</sup>。

こうした経緯を踏まえて、防衛博物館に関して「レニングラード事件」に焦点を当てた研究は、ローカルな「記念」の形成、それに対する国（モスクワ）の抑圧という政治的な構図を提示した<sup>(6)</sup>。その一方で、包囲の記念をめぐるレニングラード市民の記憶のあり方を検討した研究では、個人の記憶は国家が形成した「神話」と絡み合っていたとして国家と個人のそれぞれの戦時のとらえ方を融合的にとらえている。しかしながら、こうした研究も、レニングラード防衛博物館の閉鎖に関して、国家が包囲の記憶の根絶を目指したものとみなし、国家と個人の記憶の間の対立に重点を置いた<sup>(7)</sup>。以上の研究では、独ソ戦の記念事業と戦争博物館のあり方について、レニングラード独自のローカルな側面と、それに対する党中央の介入とが基本的な論点となってきたといえる<sup>(8)</sup>。しかし、党中央の圧力がローカルな状況に与えた影響が大きかったことは前提であるものの、介入に対する人々の対応は、単に上からの指示を受け入れるだけにとどまらなかった。レニングラードの人々は、党・国家の側からの批判に応答する過程で、記念のあり方に関するあらたな探求を繰り返すことになったのである。

外部からの介入に対して地元の人々がとった対応について考えるうえで、本稿では、博物館学の手法を参照する。独ソ戦を記念するソ連諸都市の博物館の研究においても、まずは国や地方当局といった博物館の運営者側の動向に注目が集まり、そのうえで、職員による展示事業の組織が論じられてきた<sup>(9)</sup>。しかし、それだけでなかった。具体的な例として、戦中・戦争終結直後のモスクワの赤軍博物館とミンスクの展覧会に関するハッセルマンの研究が挙げられる。ハッセルマンは、博物館の職員に分析の焦点を当て、職員たちが来館者の批判・評価・質問にどう応答したかを明らかにした<sup>(10)</sup>。ハッセルマンのこの研究は、戦争の記念をめぐるローカルな展開を、地元の人々の視点に即して明らかにした点で重要である。

5 *Соболев Г.И.* Блокада Ленинграда: от новых источников к новому пониманию // *Новейшая история России* 2012. № 3. С. 72.

6 *Бранденбергер Д.* «Репрессированная» память? Кампания против ленинградской трактовки блокады в сталинском СССР, 1949–1952 гг. (на примере Музея обороны Ленинграда) // *Новейшая история России*. 2016. № 3. С. 175–186.

7 *Lisa A. Kirschenbaum, The legacy of the Siege of Leningrad, 1941–1995 : myth, memories, and monuments*, (New York: Cambridge University Press, 2006), pp. 5, 146.

8 多くの場合、記念事業において、個別の都市のローカル色は抑制される傾向があった。キエフの事例については以下を参照。Serhy Yekelchuk, *Stalin's citizens : everyday politics in the wake of total war*, (New York: Oxford University Press, 2014), pp. 34–67. 首都モスクワの事例については以下を参照。松本祐生子「モスクワ 800 周年記念祭(1947年)と戦後スターリン期のソ連社会」『ロシア史研究』104号、2020年、54–74頁。

9 Scott W. Palmer, "How Memory Was Made: The Construction of the Memorial to the Heroes of the Battle of Stalingrad," *The Russian Review* 68, no. 3 (July 2009), pp. 373–407; Kristiane Janeke, "Politics of Memory and History in the Museum : The New "Museum of the History of the Great Patriotic War" in Minsk/Belarus," in Wolfgang Muchitsch (ed.) *Does War Belong in Museums?: The Representation of Violence in Exhibitions*, (Bielefeld: Transcript Verlag, 2013), pp. 185–202.

10 Anne E. Hasselmann, "Memory Makers of the Great Patriotic War: Curator Agency and Visitor Participation in Soviet War Museums during Stalinism," *Journal of Educational Media, Memory, and Society* 13, Issue 1, 2021, pp. 13–32.

本稿では、職員の活動に注目する博物館学の視点、とくにハッセルマンの研究から多くの示唆を得た。そのうえで、本稿ではレニングラードを分析対象として、同市特有の記念のあり方をとらえなおすことを目指す。ソ連第二の都市として多大な政治的な重要性を有するレニングラードでは、党中央の政治判断は地元の人々により強く作用した。しかし、地元の人々もまた、レニングラードでの勝利が独ソ戦の中で果たした意義、ならびに記念におけるその重要性を認識していた。それゆえ、党中央からの批判に対応しながら、みずからの問題意識も保持して、あらたな活動領域をも切り開いていったのである。

以下、本稿ではまず、「レニングラード事件」が博物館の人事や展示内容にもたらした影響と批判に対する博物館の職員の対応を検討し、1944年の前身となる展覧会の開催から1948年以降の全ソ的な戦争記念とスターリン崇拝の反映の強化にいたる、展示事業の変化をたどる。そのうえで、1949年初頭に展示が閉鎖された後に博物館の職員が行った蒐集事業を分析する。職員は、各地に出張する中で、他の都市や被占領地域との交流を通じて独自の活動を進めていた。「レニングラード事件」を機に国家とローカルの間で独ソ戦の記憶に関する力学が新たな局面を迎えた中で、職員の出張事業がローカルな記念それ自体に生じさせた質的な変化はいかなるものであったのか、博物館の文書をもとに考察する<sup>(11)</sup>。

1940年代後半から1950年代のレニングラードにおいて、戦時の経験に関する国、地方当局、来館者の捉え方は様々であり、分立し、ときに競合・対立した。こうした経験を、博物館の職員は調整して、統合するという役割を果たした。博物館の職員による博物館外における活動は、従来の研究において十分に分析されてこなかったが、記念事業の全体像を多面的に理解するうえで重要である。

史料については、まず、レニングラード州党委員会とレニングラード市党委員会に関する政治文書を用いる。これらの文書は、サンクト・ペテルブルク歴史政治中央国立文書館（フォンド24と25）が所蔵しており、「レニングラード事件」に関する数々の研究で参照されている。くわえて、本稿では、レニングラード防衛博物館に関する芸術関連文書を用いる。具体的には、サンクト・ペテルブルク文学芸術中央国立文書館所蔵のレニングラード市文化啓蒙活動部局文書（フォンド277）を用いる。メディア史料は、レニングラード州・市党委員会と同市ソヴィエトの機関紙『レニングラーツカヤ・プラウダ』、党機関紙『プラウダ』を用いる。

## 1. レニングラード防衛博物館の開館：包囲解放後の文化事業

レニングラードの博物館・美術館は、戦時の破壊に対する戦いの「前線」であった。文化財を保護するため、職員は地方への疎開や地下庫への退避に尽力した。ドイツ軍に占領されたレニングラード近郊のガッチナ、プーシキンでも、博物館員は戦時にはドイツ軍の取奪から文化財を守り、戦後、損なわれた文化的な損失を回復する戦いを続けた。カントールの研

11 博物館で働く者について、参照元の史料と文献の表記を優先した場合をのぞき、本稿では「職員」を採用する。なぜならば、防衛博物館には博物館で働くための専門的な教育を受けてきた者もいれば、軍属から転身した者もいた。一概に、公的な資格のある「学芸員」と呼称することはできないためである。

究によると、「当時、平和な職業はなかった」のである<sup>(12)</sup>。

包囲の経験を保存しようとする活動は、包囲解放前から散発的に始まった。包囲下でも、レニングラードの文化的な活動はやむことがなかった。1942年2月の時点で同市党委員会と芸術家同盟レニングラード支部は、展覧会「大祖国戦争期のレニングラード」を企画して、1942年7月に開催した。1943年には、レニングラードの芸術家によって、モスクワのトレチャコフ美術館でも、レニングラードの戦いに関する展覧会が開かれた<sup>(13)</sup>。当局、レニングラードの芸術家、博物館の職員は、一連の展示の組織を都市防衛への参加と同時に進めていたのである。

展覧会「レニングラードの英雄的な防衛」の組織者で、のちのレニングラード防衛博物館初代館長のレフ・ラコフも、包囲解放以前から展覧会の開催に携わっていた。ラコフは、軍事史家であり、エルミターージュの元職員であった<sup>(14)</sup>。戦時のラコフの活動については、1989年に再建された防衛博物館の研究員である O. マルハエヴァのインタビューで、序文に記述がある。1942年の春にラコフが組織した展覧会「ドイツの侵略者に対するソ連国家の大祖国戦争」（場所は第一赤軍通りとイズマイロヴォ通りの角）が、1943年2月から3月にレニングラード赤軍会館で開かれた別の展覧会「赤軍の25年」とともに、展覧会「レニングラードの英雄的な防衛」の元になったという<sup>(15)</sup>。つづいて、1943年6月には、レニングラード戦線政治局が「第1回戦線芸術家展」を開催した<sup>(16)</sup>。

包囲下でのこうした活動を経て、防衛博物館の前身となる展覧会「レニングラードの英雄的な防衛」が開かれる運びとなった。1943年12月4日、レニングラード市党委員会とレニングラード戦線軍事会議は、展覧会を組織することを決定した。この決定を受けて、レニングラードの製造業、社会团体、学術機関、軍隊は、展示の作成に関する作業を開始した。ここでの主な作業は、包囲下の爆撃で破壊された建物の再建と、7382点の展示品と文書の収集であった<sup>(17)</sup>。

1944年1月27日、レニングラードは包囲から完全に解放された。翌日の1944年1月28日に、少佐 V. S. チャブケヴィチを中心に、展覧会の受け入れ委員会が設立された。S. M. キーロフ名称レニングラード赤軍会館の長である陸軍大佐 N. S. ラザレフとレニングラード市ソヴィエト執行委員会芸術事業局長 B. I. ザグルスキーが、委員会に展示品を引き渡した。そして、委員会の人員と各セクションのテーマを定めた。展示は10部門、11のホールからなった。内容は、包囲戦の経過について、開戦、敵の接近、包囲の突破、そして、勝利を時

12 Кантор Ю.З. Невидимый фронт. Музеи России в 1941–1945 гг. М., 2017. С. 73.

13 Соболев Г.Л. Ленинград в борьбе за выживание в блокаде. СПб., 2013–2017. Т. 1. С. 466–467, Т. 2. С. 106, Т. 3. С. 609.

14 ОБОРОНЫ ЛЕНИНГРАДА МУЗЕЙ // Янин В.Л. (пред. ред.) Российская музейная энциклопедия: В 2 т. М., 2001. Т. 2. С. 40.

15 Cynthia Simmons, Nina Perlina, *Writing the siege of Leningrad : women's diaries, memoirs, and documentary prose*, (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2002), pp. 170–171.

16 Kirschenbaum, *The legacy of the Siege of Leningrad, 1941–1995*, p. 92.

17 ЦГАИПД СПб (Центральный государственный архив историко-политических документов Санкт-Петербурга), ф. Р-25, оп. 18, д. 195, л. 2; Соболев. Ленинград в борьбе за выживание в блокаде. Т. 3. С. 649.

系列順に伝えた。とりわけ、第5部門と第6部門では、飢餓の冬を扱った<sup>(18)</sup>。つまり、展示は、レニングラードの前線と市街における戦時の出来事を扱った。この時点で、飢餓はタブーではなく、一都市の戦争体験を語るうえで重要な要素として展示内容に含まれた。計画された展示の内容を考慮して、1月31日に、ソ連人民委員会議付属芸術事業委員会芸術事業副部長 P. I. ラチンスキーはレニングラード市党委員会書記 A. I. マハーノフに軍に精通した職員の補充を依頼した<sup>(19)</sup>。

1944年4月30日の18時に展覧会「レニングラードの英雄的な防衛」が開かれた。20時に、軍事会議、レニングラード市党委員会、同市ソヴィエト執行委員会を代表して、レニングラード州・市党委員会第一書記 P. S. ポプコフが登壇した。5月1日（メーデー）と2日には工場や部隊を招待してツアーが催され、5月7日に展示は一般公開された<sup>(20)</sup>。展示面積は12,000㎡で、1945年に20,000㎡に拡大された<sup>(21)</sup>。

1944年3月9日の時点で、展覧会「レニングラードの英雄的な防衛」を博物館に改組する構想が存在した。レニングラード市党委員会書記マハーノフが、レニングラード市州・党委員会第一書記アンドレイ・ジダーノフ、レニングラード州党委員会書記 A. A. クズネツォフ、Ya. F. カプスチン、G. F. バダーエフ宛に、改組の構想を伝えた。その際にマハーノフが挙げた理由は、「展覧会がレニングラードの防衛に関連する貴重なドキュメンタリー資料を大量に収集していること、多くの記念物、産業の展示品、かなりの数の優れた模型が作られ、様々な種類の戦利品の武器がたくさんあること」<sup>(22)</sup>であった。博物館への改組は、展覧会の組織と同様に、軍や党委員会が主導して進めた。同日、展覧会監督ラコフは、「博物館「レニングラードの英雄的な防衛」の資料は、市の党委員会の協力があるてはじめて入手できます」と書いた<sup>(23)</sup>。すなわち、収集事業は、展示の再編と並行して進められていたのである。

1945年10月5日に、建物の管理者であるロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国（以下ロシア共和国と表記）人民委員会議は、ロシア共和国文化啓蒙機関事業委員会とレニングラード市執行委員会に、展覧会をレニングラード防衛博物館に改組するように命じた。11月11日から、展覧会の職員は展覧会を博物館に変える課題の遂行に着手した。11月25日には、博物館の共和国での重要度を第2カテゴリーに分類するソ連人民委員会議令も出された<sup>(24)</sup>。

防衛博物館は包囲解放2周年、1946年1月27日に開館した。1946年の2周年記念祭の祝賀会で、レニングラード市党委員会第二書記カプスチンは、防衛博物館を包囲解放後のレニングラードにおける文化的な復興を示すものと位置づけた。「多くの研究機関と学術機関が疎開から戻ってきました。レニングラードのすべての劇場、映画館、大文化会館およびクラブが再び開きました。国立エルミタージュ美術館、レーニン博物館の別館、S. M. キーロ

18 ЦГАИПД СПб, ф. Р-24, оп. 2В-7, д. 6794, л. 1, 3.

19 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 10, д. 468, л. 7.

20 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 10, д. 468, л. 2; Выставка «Героическая Оборона Ленинграда» открыта // Правда. 01. 05. 1944. С. 4.

21 ЦГАЛИ СПб (Центральный государственный архив литературы и искусства Санкт-Петербурга), ф. Р-277, оп. 1, д. 86, л. 5.

22 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 10, д. 468, л. 38.

23 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 10, д. 468, л. 58.

24 ЦГАИПД СПб, ф. Р-24, оп. 63, д. 5, л. 7; ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 28, д. 247, л. 17.

フ博物館といったレニングラードの傑出した博物館が再建され、レニングラード防衛博物館が開館しました<sup>(25)</sup>。博物館の建設事業への参加を称え、レニングラード市執行委員会文化啓蒙部部長ラチンスキーと博物館館長ラコフにレーニン勲章が授与された。メダル「献身的な労働」が、博物館の鉛管敷設工 Z. S. アザロフに授与された<sup>(26)</sup>。防衛博物館は、エルミタージュに次いで、レニングラードで2番目に来場者数の多い博物館になった<sup>(27)</sup>。

1946年に、防衛博物館の主な活動は、展示の再編、来館者サービス、研究事業、建設工事であった<sup>(28)</sup>。展示の内容について、1946年2月に市党委員会事務局は、飢餓の時期や、防空防衛について、より展示を充実させることを定めた。包囲から脱出するための氷上の疎開ルートである「ラドガ湖の道」に関する展示も、大幅に拡張することになった<sup>(29)</sup>。博物館への改組を経ても、1946年の時点で、展示の内容は、レニングラードという一都市の前線と市街を対象としていたのである。

建設工事には、博物館の予算が割り当てられた。1947年には、ホールの再建、天井、屋根の修復に、145万ルーブルを費やした<sup>(30)</sup>。予算にくわえて、1947年3月5日のレニングラード市ソヴィエト執行委員会文化啓蒙部局の決算会議で、防衛博物館管理運営部副責任者の S. V. ヤコブソンは、展示室の整備について、モスクワに行き、レニングラードで生産されていない大きな電球を手に入れる必要があると述べた<sup>(31)</sup>。防衛博物館が、レニングラードにとって特別な文化施設であったことが窺える。

## 2. 展示事業の組織：来館者に着目して

### 2-1. 外国の来賓

防衛博物館には、どのような人々が来館したのか。1944年に、展覧会には、約35万人が訪れた<sup>(32)</sup>。展覧会には、勤労者、学生、軍人が来場した。1944年、展覧会「レニングラードの英雄的な防衛」に関する反響には、将校の集団や学生の感想があった。レニングラード戦線の飛行部隊の将校は、おのおのの展示品は真実を伝えるものであると言った。レニングラード水運大学の学生は、展示が彼らをレニングラードの再建に奮起させると語った。ほかに、作家 A. トルストイと府主教ニコライの感想が記された。外国の来賓としては、イギリスの海軍将官ダグラス・フィッシャー、アメリカの海軍将官 K. オルセン、カナダ大使ウィルグレス、アメリカの代理大使マックスウェル・M. ハミルトンが来館した。オーストラリア公使マロニーは、展示について、「誰にも、ナチスとの戦争の成功した終結に導いたレニングラード市民の英雄的な闘争をよりいっそう評価する機会を与える」と記した<sup>(33)</sup>。1945年には、ア

25 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 2-4, д. 5891, л. 24.

26 ЦГАИПД СПб, ф. Р-24, оп. 2В-8, д. 7934, л. 1, 11.

27 *Бранденбергер*. «Репрессированная» память? С. 178.

28 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 457, л. 1-5.

29 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 28, д. 247, л. 30, 31.

30 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 55, д. 22, л. 5.

31 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 541, л. 10.

32 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 86, л. 5.

33 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 10, д. 468, л. 59-60об.

アメリカの陸軍大将 D. アイゼンハワーとソ連邦将軍 G. ジューコフが来館して、展示を賞賛したとも記録された<sup>(34)</sup>。

ここで、1944年のソ連が置かれた国際的な立場が窺える。具体的な出来事としては、1943年11月にアメリカ、イギリス、ソ連の指導者がテヘラン会談を開催して、1944年6月ノルマンディー上陸作戦が決行された<sup>(35)</sup>。戦後処理の討議が進む過程で、ソ連が防衛博物館への来賓を招待したことは、アメリカやイギリスに対するソ連の外交戦略の一環であったと理解できよう。防衛博物館の来館者記録には、レニングラード包囲に関する数々のエピソードは、ナチスとの戦いでソ連が果たした「英雄的な」役割を強調したことが窺える。

1946年に、賓客の構造は変化した。博物館には、ヴォルクタの代表団やヴォロシーロフ名称軍事大学の学生（300人の将官）が訪れた。作家 N. S. チーホノフ、同志ゴルキン [ソ連最高会議幹部会書記]、P. P. ヴェルシゴラ将軍も来訪した。外国からは、ブリテンの労働組合、チェコスロバキアとブルガリアの青年、ユーゴスラビアの国民教育家、チェコスロバキアの学生代表団などが来館した<sup>(36)</sup>。1944年から1946年の2年間で、レニングラード包囲戦に関する対外的な宣伝の対象は、英米の公人、軍人から、東欧諸国の労働者、青年に移っていった。

ここには、1946年のソ連が、東欧に対する政治的な影響力を強めていたことがあらわれている。イデオロギー宣伝の一環として、独ソ戦は米英に対してみずからの正当性を示す切り札となっただけではなかった。レニングラード包囲に関する防衛博物館の展示は、独ソ戦におけるソ連市民の活躍を伝えることで、東欧諸国の青年や労働者に連帯を求めた。

## 2-2. 都市住民

つづいて都市住民の来館者について分析する。分析にあたって、戦後、レニングラードの住民は、包囲を経験していない者がむしろ多数となったことに注意する必要がある。1939年に302万人であった人口は、1943年に62万人、1944年に55万人まで減少した。包囲解放後、疎開先や前線から毎年数十万人の住民が流入して、1949年に人口は222万人に回復した。その一方で、レニングラードを離れる者は、毎年15万から20万人にのぼった<sup>(37)</sup>。レニングラード市民は、記念の参加者になったが、必ずしも包囲の経験者であるとは限らなかつ

34 ラコフが、海軍政治局長トリクに宛てた報告による。ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 28, д. 251, л. 45.

35 対独戦勝記念日の翌日、1945年5月10日付の『プラウダ』紙では、イギリス首相チャーチル、アメリカ合衆国大統領トルーマンの顔写真と、スターリンの全身の写真が並んだ。テヘラン会談でスターリン、ルーズヴェルト、チャーチルが座って並ぶ写真も掲載された。И.В.Сталин, Ф.Д.Рузвельт и У.Черчилль в дни Тегеранской конференции // Правда. 10. 05. 1945. С. 1.

36 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 457, л. 2; ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 10, д. 613А. л. 5. ゴルキンについては以下を参照。Горкин А.Ф. // Хлевнюк О.В. и др. (сост.) Политбюро ЦК ВКП(б) и Совет Министров СССР. 1945–1953. М., 2002. С. 575. チーホノフとヴェルシゴラについては、以下を参照。ТИХОНОВ Николай Семёнович // Прохоров А.М. (глав.ред.) Большая советская энциклопедия (БСЭ). 3-е изд. М., 1970–1981. Т. 25. С. 596; ВЕРШИГОРА Пётр Петрович // Там же. Т. 4. С. 568.

37 ЦГА СПб (Центральный государственный архив Санкт-Петербурга), ф. 4965, оп. 8ЧС, д. 738, л. 4, л. 4-5а. 1944年に42万人、1945年に66万人、1946年に49万人が転入した。一方で、1946年に16万人、1947年に19万人、1948年に15万人、1949年に17万人が転出した。Там же.

たのである。

人口の構造もまた、特殊であった。戦時中、ドイツ人やフィン人が追放されて以来、レニングラードの住民の圧倒的多数はロシア人だった。戦時に発生した男女比の不均衡は戦後も続き、女性の数は男性の約2倍であった<sup>(38)</sup>。

博物館への改組後、1946年の来館者は35万人にのぼった。これは、予想されていた25万人を大幅に上回るものだった。内訳は、個人客が22万2000人、勤労者の団体客が4万3000人、学生3万2000人、学童2万5000人、軍人2万8000人、外国の客3000人であった<sup>(39)</sup>。

1946年12月13日付の指導員コノヴァリョフの報告（党宣伝扇動部副局長S.I. アヴァクモフ宛）では、1945年の来館者が19万2800人であったと言い、1946年の来館者が前年の2倍以上であったことを強調した。博物館には、外国から到着した95の団体を含む、3000以上の団体が訪問した<sup>(40)</sup>。その後、1946年から1949年まで、博物館には一年で約30万人が来訪した<sup>(41)</sup>。

博物館の役割は、1947年3月のレニングラード市ソヴィエト執行委員会文化啓蒙局決算委員会における、議長のN.D. クジミーンの言葉に集約されている。「ここで、少なくとも、事業の組織について私が言ったのは、以下のことです。短編映画の製作は防衛博物館に対する視覚的な注目を集めるものであり、これが単なる歴史博物館ではない、つまり過去数世紀の便覧のようにときどき参照できるだけのものではないと、人々が感じるようにします。そして、これは今日の博物館であり、英雄都市に対する態度を形成して、人々に愛国の感情を育てると、人々が感じるようにします。つまり、博物館の大衆化は、収益面を高めるという観点だけでなく、我々の都市に来る人々は言うまでもなく、都市の住民に世界観を浸透させるということです<sup>(42)</sup>。「短編映画の製作」とは、博物館で『ラドガの道、生の道』や『レニングラードでの偉大な勝利』といった映画の上映にくわえて、所蔵の映像を用いて映画製作を行っていたことを指すものと推測される<sup>(43)</sup>。博物館は、教育の対象は住民であると明示し、展示が市民にとって包囲について立ち返るための場になることを目的とした。

団体客の組織は、博物館の主な事業の一つであった。1947年に組織されたツアーの数は、勤労者が917回、軍人が397回、学童641回、大学と中等専門学校の学生389回、工場学校434回であった。外国からのツアーは24カ国から、来賓を含めて178回だった<sup>(44)</sup>。1946年には、勤労者のために戦場跡へのバスツアーも100回組織された<sup>(45)</sup>。こうしたエクスカージョン事業は、レニングラードに博物館それ自体の長い伝統が存在したがゆえに、とりわけ

38 Richard Bidlack, Nikita Lomagin, *The Leningrad blockade, 1941–1944: a new documentary history from the Soviet archives*, (New Haven: Yale University Press, 2012), p. 3; ЦГА СПб, ф. 4965, оп. 3-1, д. 209, л. 22–23, 29.

39 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 457, л. 2; ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 10, д. 613А. л. 5.

40 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 10, д. 625А. л. 6.

41 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 692, л. 3об.

42 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 541, л. 13об–14.

43 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 690, л. 2.

44 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 55, д. 22, л. 4–5.

45 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 457, л. 3.

積極的に行われたと考えられる<sup>(46)</sup>。

1948年には施策の一つとして、博物館はソ連軍30周年記念日(2月23日)とメーデーなどに、都市の勤労者と軍人を8400人以上、無料で招待した<sup>(47)</sup>。数ある祝日の中で、とりわけ軍や労働に関する祝日に訪問を設定したのである。このことから、定量的だけではなく定性的にも、博物館は来館者として軍人と勤労者を重視していたと考えられる。

軍人の来館に関して、ひとつのエピソードが、1947年の『レニングラーツカヤ・プラウダ』紙で報じられた。レニングラード防衛博物館で、陸軍大尉ドミトリー・オサチュークは、自身の戦功についてガイドが説明するのを目の当たりにした<sup>(48)</sup>。このエピソードが示すものは、博物館には、前線での勝利、軍人の活躍について人々に説明するという役割があったということである。戦後、ジューコフをはじめとする将軍は、スターリンをはじめとする党指導部の権威を脅かす存在だとみなされ、政治的に厳しく処遇されていた。帰還兵もまた、平和な日常を取り戻そうとする社会の中で、新たな暮らしへの適応に困難をきたして孤立することがあった<sup>(49)</sup>。この状況で、高位の軍人にとって、展示はメダルや勲章と同様に、みずからの戦功を確認する貴重な場となっていたことが窺える。

勤労者の組織は、地区の党委員会と博物館の共同事業であった。1949年8月5日には、博物館の副館長イコンニコフと博物館ツアー局長V. S. コシュュークが作成したレニングラード市党委員会宣伝扇動部宛の報告書で、各地区のツアー数と、参加人数が記された。合計で、676回のツアーが行われ、2万7040人が参加した。最多は、オクチャープリ地区のツアー90回、参加者3600人であった。最少はカーニン地区で、ツアー28回、参加者1120人であった。イコンニコフは、一部の地区の訪問者数が少ない原因は、当該地区の組織事業が弱いからであるとして、レニングラード市党委員会宣伝扇動部に組織を強化するよう求めた。1949年9月から12月までの3か月で、ジダーノフ地区の工場では、40人が参加するツアーが各1-2回組織された。合計で20回のツアーが行われ、地区全体で800人がツアーに参加した<sup>(50)</sup>。

このようなツアーの重視にもかかわらず、来館者の多くは、組織されていない個人客であった。この事態を受けて、1948年10月に、博物館は、個人客への案内用に、博物館のガイドブック、カタログを販売することをレニングラード市党委員会宣伝扇動部副部長スモロヴィクに提案した<sup>(51)</sup>。個人客のため、すべての地図、図、パノラマに説明文もつけた<sup>(52)</sup>。

46 エクスカーション事業と博物館の伝統に関しては以下を参照。Emily D. Johnson, *How St. Petersburg learned to study itself: the Russian idea of kraevedenie*, (University Park, PA.: Pennsylvania State University Press 2006), pp. 82-96.

47 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 690, л. 3. ソ連軍の日は1918年1月に制定され、毎年祝われていた。ДЕНЬ СОВЕТСКОЙ АРМИИ И ВОЕННО-МОРСКОГО ФЛОТА // *Прохоров*. Большая советская энциклопедия. Т. 8. С. 100.

48 *Ланской М.* Незабываемое // Ленинградская правда. 26. 01. 1947. С. 3.

49 *Зубкова Е.Ю.* Общество и реформы 1945-1964. М., 1993. С. 25-30. 1950年代、退役軍人の活動で博物館が果たした役割については、以下を参照。Mark Edele, *Soviet veterans of the Second World War: a popular movement in an authoritarian society: 1941-1991*, (Oxford: Oxford University Press, 2008), pp.173-174.

50 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 18, д. 195, л. 10-11.

51 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 691, л. 12.

52 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 692, л. 8.

来館者の記録は、博物館が、市民が日常的に、もしくは祝日に訪れ、包囲の歴史を学ぶ場であったことを示している。博物館の職員は、展示をつうじて、包囲を経験していない者に対しても、戦時の全体像を描けるよう包括的な説明に努めた。前線にいた軍人や銃後にいた勤労者に対しては、来館者がみずからの戦争体験を都市の歴史で把握できるように、展示を組織した。

以上のように、博物館とその前身の展示会は、戦時下での芸術家や博物館の職員の散発的な活動を、軍や市の党委員会が一都市の経験として展示を主導したことで始まった。来館者事業では、市民、とりわけ勤労者と軍人を重視してツアーを組織した。こうした博物館のあり方を踏まえ、次節では、1948年以降の政治抑圧がなにをきっかけに本格化して、防衛博物館にいかなる影響をもたらしたのかを検討する。とりわけ、博物館の職員がどのように事業を変更したのかを明らかにする。

### 3. 「レニングラード事件」と防衛博物館

#### 3-1. アンドレイ・ジダーノフ：都市の指導者をめぐる記念と追悼

アンドレイ・ジダーノフの死を機に、レニングラード包囲の記念のあり方は変化した。ジダーノフは、包囲期のレニングラード州・市党委員会第一書記で、1934年から党中央委員会書記も務めていた<sup>(53)</sup>。包囲解放記念祭の報道と、祝賀会で述べられた祝辞において、ジダーノフは一貫して称揚された。1944年1月27日、包囲解放とレニングラード戦線の部隊の攻撃の成功に関する祝電では、「レニングラードでのドイツ人の粉砕の組織者同志ジダーノフに栄光あれ!」「レニングラードのポリシェヴィキの指導者同志ジダーノフ万歳!」「偉大なるスターリンの戦友であり、レニングラードの防衛と勝利の偉大な指導者であり首唱者であるアンドレイ・アレクサンドロヴィチ・ジダーノフ万歳!」と記された<sup>(54)</sup>。

ジダーノフを賞賛する根拠は、包囲の指導者であるということだった。住民の中には、包囲下の飢餓に関する責任が党中央ないし地方当局にあるという考えも存在したが、ジダーノフは戦後も順調に職務を続けた<sup>(55)</sup>。1945年からジダーノフはヘルシンキでソヴィエト管理委員会の任務に当たり、1946年以降は党中央において「ジダノフシチナ」と呼ばれる文化に

53 Жданов А.А. // Хлевнюк. Политбюро ЦК ВКП(б) и Совет Министров СССР. С. 577. Ленинградская область - 1-й секретарь, А. А. Жданов (1934 г. 12 мес. - 1945 г. 1 мес.), А. А. Кузнецов (1945 г. 1 мес. - 1946 г. 3 мес.), Р. С. Попков (1946 г. 3 мес. - 1949 г. 2 мес.), В. М. Андрианов (1949 г. 2 мес. - 1953 г. 11 мес.) занимали. ЖДАНОВ Андрей Александрович, КУЗНЕЦОВ Алексей Александрович, ПОПКОВ Пётр Сергеевич, АНДРИАНОВ Василий Михайлович // Байкулов С.З., Матвеев Я.Ю. (отв. выпуск) Руководители Санкт-Петербурга. СПб., 2003. С. 356-361.

54 ЦГАИПД СПб, ф. Р-24, оп. 2Г-2, д. 1692А. л. 97, 105, 119.

55 Ломагин Н.А. В тисках голода : Блокада Ленинграда в документах германских спецслужб и НКВД. СПб., 2000. С. 14; Kees Boterbloem, *The Life and Times of Andrei Zhdanov, 1896-1948*, (Montreal & Kingston: McGill-Queen's University Press, 2004), pp. 331-334. 包囲下でのジダーノフの役割について、クズネツォフと比較した研究は以下を参照。Кутузов В.А. А. А. Жданов или А. А. Кузнецов? К вопросу о лидерстве в блокированном Ленинграде // Новейшая история России. 2012. № 1. С. 193-203.

関する引き締め政策を展開した<sup>(56)</sup>。ジダーノフとともに、レニングラード州党委員会書記クズネツォフ、国家計画委員会（ゴスプラン）議長 N. A. ヴォズネセンスキーも党中央委員会に抜擢された<sup>(57)</sup>

包囲を生き延びたジダーノフは、1948年8月31日にノヴゴロドの町ヴァルダイで死亡した。9月1日にモスクワで行われたジダーノフの葬儀は、前任のレニングラード指導者キーロフに匹敵するほどの規模であったと言われている<sup>(58)</sup>。ジダーノフの死に際して、レニングラード市党委員会はスターリン宛に、ジダーノフを記念した改称の例を伝えた。レニングラード市のプリモルスキー地区はジダーノフ地区に変更され、レニングラード大学や空軍機関など各機関には名前が冠された<sup>(59)</sup>。

防衛博物館では、1948年10月以降も、「スターリンの戦友」としてジダーノフの指導的な役割をレニングラードの党組織とあわせて示すよう努めた。演説の引用や写真の展示に加えて、中將の制服を着たジダーノフの胸像が「大祖国戦争初期のレニングラード」のホールに置かれていた<sup>(60)</sup>。この胸像は、1946年の開館当初から、「党中央委員会政治局員」の胸像として戦勝ホールに置かれていたようである<sup>(61)</sup>。1953年、博物館の解体の際に、ジダーノフの胸像は所蔵品のリストに価格とともに記載された<sup>(62)</sup>。つまり、開館から閉館まで、ジダーノフの胸像は破壊されなかったということである。

ジダーノフの死から半年後、1949年1月の包囲解放記念祭は、ジダーノフへの追悼が表明される場となった。キーロフ劇場での祝賀会で、レニングラード市党委員会第二書記カプスチンは、ジダーノフについて「同志スターリンの永遠の戦友」で「都市の英雄的な防衛を指導した党組織の長」であったと述べ、黙とうをささげた。出席者は全員立ち上がり、オーケストラは葬送曲を演奏した<sup>(63)</sup>。ソ連邦将軍レオニード・ゴヴォロフは、『レニングラーツカヤ・プラウダ』紙で、ジダーノフについて「スターリンの永遠の戦友であり前線の軍事会議のメンバー」であったと言った<sup>(64)</sup>。レニングラード包囲の勝利の功績はジダーノフの追悼を

56 Shiela Fitzpatrick, *On Stalin's team: the years of living dangerously in Soviet politics*, (New Jersey: Princeton University Press, 2015), pp. 177-178, 183-184.

57 クズネツォフは、党中央委員会組織局局長・党中央委員会書記(1946-1949年)、レニングラード州・市党委員会第一書記(1945-1946年) 他を歴任した。ヴォズネセンスキーは、党中央委員会政治局員(1947-1949年)、国家計画委員会(ゴスプラン)議長(1939-1949年) 他を歴任した。Кузнецов А.А. // *Хлевнюк. Политбюро ЦК ВКП(б) и Совет Министров СССР*. С. 584; Вознесенский Н.А. // Там же. С. 573.

58 Werner G. Hahn, *Postwar Soviet Politics: the fall of Zhdanov and the defeat of moderation, 1946-53*, (London: Cornell University Press, 1982), p. 28; Кутузов В.А. Загадочная смерть А. А. Жданова // *Новейшая история России*. 2013. № 1. С. 172-174.

59 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 18, д. 68, л. 24.

60 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 691, л. 5, 11.; ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 692, л. 2об.

61 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 457, л. 1; ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 28, д. 247, л. 17.

62 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1561, л. 5.

63 Торжество в Ленинграде // *Правда*. 28. 01. 1949. С. 1.

64 *Маршал Советского Союза Л.А.Говоров. Город-богатырь // Ленинградская правда*. 27. 01. 1949. С. 1. ゴヴォロフは1897年生まれ。1942年6月からレニングラード戦線の司令官を務め、包囲の突破を率いた。ГОВОРОВ Леонид Александрович // *Байкулов, Матвеев. Руководители Санкт-Петербурга*. С. 514-516; ГОВОРОВ Леонид Александрович // *Залесский К.А., Великая*

つうじて、スターリン崇拝に取り込まれたのである。

### 3-2. ジダーノフ死後の防衛博物館

ジダーノフの死は党内の政治闘争を引き起こし、レニングラードに対する攻撃を惹起した。党中央委員会書記 G. M. マレンコフ、党中央委員会政治局員 L. P. ベリヤは党中央委員会内部で勢力を拡大した。1949年2月15日、前任のレニングラード州・市党委員会書記で、党中央委員会書記クズネツォフ、レニングラード州・市党委員会第一書記ポプコフとロシア共和国閣僚会議議長 M. I. ロジオーノフについて、彼らの「反党行動」を非難する政治局決定が出された。その後、1949年7月から9月にかけて、党中央委員会ではクズネツォフ、ヴォズネセンスキーが逮捕され、レニングラードではポプコフやカプスチンが逮捕された<sup>(65)</sup>。

1948年9月から1949年2月にかけて、この半年に発生した政情の急変は、レニングラード防衛博物館の事業に多大な影響をもたらした。1949年2月21日、モスクワから党中央委員会書記マレンコフがレニングラードに到着して、博物館の調査を行った。博物館の歴史に関する概説書よれば、その後、レニングラード防衛博物館は1949年秋に「修理のため」臨時閉館したと記されている<sup>(66)</sup>。

閉館の理由について、博物館のガイドブックは、武器を「反ソ的な」目的で利用しようとしたという「制裁のための新しい口実が生じた」と語った<sup>(67)</sup>。キルシェンバウムの研究では、展示がマレンコフに「反党」であるとみなされ、閉鎖はスターリンの偉大さを展示により反映するためであったという理由を採用している<sup>(68)</sup>。1951年、レニングラード州党委員会宣伝扇動局専門部局長ミシチェンコは、同州党委員会書記 N. D. カジミンに「1949年、展示品の重大な過ちの存在により、博物館は閉鎖された」と書き送った<sup>(69)</sup>。「重大な過ち」の内容を具体的に挙げたのは、1949年9月26日の市党委員会宣伝扇動部会議で、出席者のクロヴァコフの発言である。クロヴァコフは「印象的なものはたくさんあった。氷のホール、はかりの上にあるひとかけのパンなど」と言いながらも、展示が「疲労感と重苦しい感情」を与えるとその暗さを批判した<sup>(70)</sup>。これは、飢餓に関する展示を間接的に批判していたと考えられ

---

Отечественная война. Большая биографическая энциклопедия. М., 2013. С. 153.

65 Постановление Политбюро о снятии с должностей А.А.Кузнецова, М.И. Родионова, П.С.Попкова // *Хлевнюк*. Политбюро ЦК ВКП(б) и Совет Министров СССР. С. 66; *Болдовский К.А., Бранденбергер Д.* Обвинительное заключение «ленинградского дела»: контекст и анализ содержания // *Новейшая история России*. 2019. № 4. С. 996–997; Капустин Я.Ф. // *Хлевнюк О.В. и др. (отв. ред.)* ЦК ВКП(б) и региональные партийные комитеты. 1945–1953. М., 2004. С. 427; Родионов М.И. // Там же. С. 451.

66 *Шишкин А.А., Добротворский Н.П.* Государственный мемориальный музей обороны и блокады Ленинграда: краткий исторический очерк. СПб., 2010. С. 27. ドウビニンは「技術的理由」であるという記録を残している。 *Бранденбергер*. «Репрессированная» память? С. 179.

67 Государственный мемориальный музей обороны и блокады Ленинграда. СПб., 2007. С. 2.

68 Kirschenbaum, *The legacy of the Siege of Leningrad, 1941–1995*, pp. 144–145.

69 ЦГАИПД СПб, ф. Р-24, оп. 63, д. 5, л. 11. 1947年にも、ホールの再編のため博物館は2か月閉鎖され、5月2日に再び開かれた。ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 541, л. 9об; ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 18, д. 195, л. 3.

70 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 28, д. 352, л. 1.

る。開館当初の展示内容に飢餓が含まれていたことを思い起こすと、大きな変化が生じたといえる。

それでは、「スターリンの偉大さ」は展示にどう反映されたのか。1948年9月以降、ジダーノフへの称賛は死後も保持されていた。しかし、指導者崇拜の面でも、展示の変更を進めるよう迅速な対応があった。市の党委員会と博物館の職員は、展示内容の見直しを急速に進めた。1948年10月、博物館は、レニングラード市党委員会宣伝扇動部副部長V.I. スモロヴィクに宛て、展示におけるイデオロギー上の「重大な欠陥」を報告した。そして、党事務局と博物館の職員の間にはいさかきがあったといい、党員か否かにかかわらず職員を教育するために自己批判を求めた<sup>(71)</sup>。そして、展示の不備について、スターリンの戦功が地図だけしか示されていないということも指摘した。第8ホールが、「展示の欠陥のため、ガイドは複雑なルートを行く」と批判の対象になった。ホールの左側に1941年11月7日のスターリンの演説とモスクワ攻防戦に関する展示、右側にレニングラードへの武器の送付、ジュコーフの電報、封鎖網の展示があった。そのため、ツアーはまず左側を進んで右側の壁に戻り、後方の壁に展示されている地図に戻らなければならなかった<sup>(72)</sup>。つまり、ツアーでは、戦時中の出来事の順番を確定して来館者に理解させ、レニングラード包囲戦の中にスターリンを位置づけることを目的とした。そのために、展示室の空間的な利用に注意を払うことが重要であった。

そうした中で、スターリンの役割を示すために、展示内容はレニングラード包囲以外の内容をより扱うようになった。スターリンの著作である『ソ連邦の大祖国戦争について』（1947年刊行）に沿って展示内容を再編して、スターリングラード、クルスクの戦い、さらには対日戦に関する展示を追加した。レニングラード戦線のみならず、ヴォルホフ戦線の展示もくわえた。同時に、防衛線の建設、病院で働く女性、防空防衛など、市街に関する展示も強化した<sup>(73)</sup>。1948年12月30日に、館長V.P. コヴァリョフはラチンスキー宛に展示の改善計画を出した。計画では、同日付のレニングラード市ソヴィエト執行委員会の文化啓蒙部局令285号に従い、ツアーのルート上にある展示を改善する緊急措置として、戦時下のスターリンの役割に焦点を当てた形で、合計9つのホールの再編を予定した<sup>(74)</sup>。

翌年、1949年2月17日付の防衛博物館の計画では、第2、3、4ホールの再編にあたり、スターリンについて、包囲開始以前の出来事である1941年7月のラジオ演説とソ連国防人民委員への就任に関して展示で言及し、そして、スターリンの発言を度々引用するように改

71 自己批判に関しては、以下を参照。Alexei Kojevnikov, “Rituals of Stalinist Culture at Work: Science and the Games of Intraparty Democracy circa 1948,” *The Russian Review* 57, (January 1998), pp. 25–52; 長尾広視「党の指導と批判・自己批判の相克：1940年代後半の『文学新聞』編集部の実践に着目して」中嶋毅編『新史料で読むロシア史』山川出版社、2013年、184–202頁。

72 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 691, л. 8–9. 戦争博物館における展示の順番の重要性については、ドレスデンの軍事史博物館に関する以下の論文を参照。ドレスデンは、第二次世界大戦で空爆による大規模な破壊を被ったという特徴がある。くわえて、古都という点でも、サンクト・ペテルブルクと共通する。Cristian Cercei, “The Military History Museum in Dresden: Between Forum and Temple,” *History & Memory* 30, no. 1, (Spring/Summer 2018), p. 27.

73 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 694, л. 1–5, 17.

74 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 695, л. 2–6.

編した<sup>(75)</sup>。展示の再編にあたって、博物館では自己批判が行われた。その結果、展示におけるスターリンの役割は、かつてはジダーノフの「戦友」という形でレニングラード包囲の関与に言及されていたが、あらたにスターリンの演説やモスクワ攻防戦に関する展示の拡大・強化という方法で示されるようになった。このことからわかるように、展示は、レニングラード包囲に焦点を当てたものから、独ソ戦全体を語るように変更された。

### 3-3. 「レニングラード事件」と展示の再編

「レニングラード事件」に関する近年の研究は、レニングラードに対する党の告発・非難がすべて事実であったとは考えておらず、国からレニングラードに対する抑圧の原因として、党中央委員会内部の闘争やレニングラードに対するスターリンの反感が挙げられている。とくに重要なのは、レニングラードの党組織が党の指揮系統に反した行動をとったと「みなされた」ことである<sup>(76)</sup>。1949年8月から10月にかけて、ポプコフやカプスチンが逮捕されたのと同時期に、党指導部は防衛博物館の展示に対して、浪費と隠蔽行為という二つの批判を行った。本稿では、この二つの批判について、どのように党の指揮系統に反したのか、内在于する論理を検討する。

1949年8月8日、レニングラード市ソヴィエト執行委員会文化啓蒙事業部部长ラチンスキーは、レニングラード市ソヴィエト執行委員会書記 V. Ya. コズロフ宛の文書において、18枚の油絵の肖像画と44枚の写真の肖像画の製作と設置の費用について批判した。肖像画は、博物館に改組する際に展覧会の受け入れ委員会が、胸像に追加する形で戦勝ホールと産業ホールに置くことを提案して、1946年に博物館の予算で作成した。製作者は、大きい肖像画はトレスキン、小さい肖像画はバンティコフを含む画家の集団であった。重複をのぞいて56名分、62枚の肖像画には、ポプコフとカプスチン、ラズーチン、クズネツォフも含む、党、ソヴィエト、コムソモール、経済機構の活動家が描かれていた。「戦勝ホールで2枚の大きな肖像画（ポプコフとカプスチン）を追加で制作する実際の費用は1万2000ルーブルで、16枚の肖像画の費用は5万ルーブルに達した。（事前の予算の計算によると、この作品には10万ルーブルかかることになっていた）」<sup>(77)</sup>。しかし、1949年8月8日に、レニングラード市ソヴィエト執行委員会書記コズロフは、レニングラード州・市党委員会書記 V. M. アンドリアーノフに宛て、カプスチンとポプコフの肖像画は1枚1万ルーブル、16枚の肖像画は1枚5000ルーブル、その他の費用もあわせて合計で16万7000ルーブルに達したと報告した。ポプコフの肖像画を製作して1万ルーブルを受けとりポプコフの妻の肖像画を無償で製作したという、画家 V. M. イズマイロヴィチの証言も出された。レニングラード州・市党委員会総務部長ラディーギンは、ポプコフが肖像画の代金を支払わなかったとして、総務部の職員 N. V. コロトコフが肖像画代を支払ったという領収書を提出した<sup>(78)</sup>。

ここで、党倫理に違反すると考えるレニングラード党指導部側の論点は、肖像画の制作そ

75 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 981, л. 12.

76 抑圧の原因については以下を参照。Catriona Kelly, “'The Leningrad Affair': Remembering the 'Communist Alternative' in the Second Capital,” *Slavonica* 17, no. 2, (November 2011), p. 106.

77 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 28, д. 247, л. 17-18, 36.

78 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 28, д. 247, л. 18-26, 32.

のものではなく、予算・財政面で、「浪費」したことであった。しかし、ポプコフには代金の支払いをめぐる疑惑が浮上していただけではなく、彼自身が肖像画にかかれていた以上、肖像画は指導者崇拝の問題に抵触していたといえる。スターリン崇拝は、側近の指導者や、主要都市、共和国の指導者の崇拝に拡大することで強化されており、肖像画はその重要なツールであった<sup>(79)</sup>。肖像画に対する「財政上の」批判は、ジダーノフ以外のレニングラードの指導者、とりわけポプコフとカプスチンを巧妙かつ強力に排除することになった。

もう一つの非難は、1949年に、レニングラード州・市党委員会書記アンドリアーノフが、党中央委員会書記マレンコフと、スターリンに宛てた書簡に記したものである。その書簡で、アンドリアーノフは、展示の中に武器が隠されており、300キログラムの砲弾の火薬が敷地内に埋められていたと報告した。武器、弾薬、火薬はすべて、軍事機関に引き渡された。博物館館長コヴァリョフは解任された。博物館の職員の中でも、軍事技術部門長イコンニコフが逮捕され、「べてん師で山師」であると言われた<sup>(80)</sup>。

1949年9月29日に後任の館長L. A. ドゥビニンは、アンドリアーノフに宛てた報告書で、次のように弁解をした。ドゥビニンによると、爆発物は博物館で展示し、映画撮影で使用するためにレンフィルムに引き渡したという。また、3日間で、大量の小型武器を博物館から砲兵倉庫に移したとも付け加えた<sup>(81)</sup>。

翌日の9月30日に館長ドゥビニンは、アンドリアーノフに宛てた報告書では、博物館の職員である武器職人シェステルネフ、武器工房長チホミーロフに対する尋問の内容を詳しく伝えた。シェステルネフは、チホミーロフの指示で火薬を埋めたと述べた。チホミーロフは火薬を引き渡さなければならないと進言したが、前館長のコヴァリョフがその措置を延期したと述べた。ほかに、チホミーロフはドイツでの戦利品の武器が盗難された事件が数度起こったとも申告した。コヴァリョフは、倉庫に武器が存在することを知っており、そのことをレニングラード軍管区の砲兵部隊の中尉に質問したが、回答を拒否されたと述べた<sup>(82)</sup>。ここでは、火薬を埋めたことが非難されたのではなかった。盗難事件を報告しないという、隠蔽の行為が問題であったのである。したがって、尋問された者は、自分は報告したが、上司や別の責任ある立場の者が聞き入れなかったという弁解を展開した。

このように、党指導部から防衛博物館に対してくわえられた批判において、指導者の記念や武器の展示それ自体が対象とされたわけではなかった。戦利品部門における武器の展示は、1944年に展覧会を博物館に改組するさいの理由の一つであり、武器の存在自体は問題でなかった<sup>(83)</sup>。批判では、展示そのものを批判するというよりは、予算の浪費や事件の隠ぺい行為という党規範への明らかな違反を前面に押し出した。

79 スターリン崇拝については以下を参照。Rees, E. A., "Leader Cults: Varieties, Preconditions and Functions," in Balázs Apor, Jan C. Behrends, Polly Jones, E. A. Rees (eds.), *The Leader Cult in Communist Dictatorships: Stalin and the Eastern Bloc*, (New York: Palgrave Macmillan, 2004), p. 10.

80 ЦГАИПД СПб, ф. Р-24, оп. 54, д. 518, л. 60-61.

81 ЦГАИПД СПб, ф. Р-24, оп. 54, д. 518, л. 67.

82 ЦГАИПД СПб, ф. Р-24, оп. 54, д. 518, л. 68-70.

83 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 10, д. 468, л. 38.

しかしながら、これらの批判は口実以上の作用をもたらした。告発は「上から」行われただけでなく、職員同士で行われ、職場に混乱をもたらしたという点で、1930年代末の密告の構図と共通している<sup>(84)</sup>。そのうえで、これらの批判は、1949年夏、すなわち、レニングラードの党指導部の逮捕と同時期に行われた。つまり、マレンコフ側は、政敵との戦いにおいて完全なる勝利を収めていなかった。防衛博物館の事例は、武器や弾薬といった軍に関する展示の扱いをめぐる告発でありながらも、レニングラードの前指導部にとって、浪費と隠蔽行為という包囲で得られた名誉を棄損するような理由が強調されたという点で、新しい党指導部が政敵の確実な打倒を優先して慎重に事態を進めたことが窺える。こうしたモスクワの党指導部による防衛博物館に対する攻撃には、レニングラード包囲の記念が党のイデオロギーを超えて、戦時の党の対応への不満に転じることや、独自の英雄的意義を持つことへの警戒心があった可能性もある。

### 3-4. 事件後の経過

レニングラードの指導者を描いた肖像画と敷地内の武器に関する批判は、同市の他の文化施設にも影響を及ぼした。まず、レニングラード防衛博物館元館長で、シCHEDリン図書館館長であるレフ・ラコフには責任があるとみなされた。ラコフは、1947年5月20日付で、防衛博物館館長の職を外れ、シCHEDリン図書館館長に就任した。その際に、ラコフは、レニングラード防衛博物館の開設時の仕事が称賛されていた<sup>(85)</sup>。1949年10月19日のレニングラード市党委員会事務局会議で、ラコフは、レニングラードの元指導者の肖像画の制作を主唱し、博物館内に武器を違法に置いていたと非難された。ラコフはシCHEDリン図書館館長の職を解任された<sup>(86)</sup>。ラコフは25年の禁固刑を宣告されて、ウラジーミル中央監獄に入り、4年後解放された<sup>(87)</sup>。ここで、批判の対象は肖像画の制作費から、肖像画の制作そのものに変化していたことが見てとれる。博物館館長に対して、単なる浪費ではなく、党指導部との密接な関係を公然と非難したのである。

ラコフの逮捕後、各機関の職員は、緊張状態に置かれた。「レニングラード事件」のみならず、ユダヤ人を対象とした全ソ的な抑圧である「コスモポリタニズム批判」も進展していた。そのことは、シCHEDリン図書館で、人員リストに記入する際にある職員がユダヤ系の名前を持つ夫との結婚歴を隠すことなどにあらわれた<sup>(88)</sup>。防衛博物館では人員数の削減が続いた。人員数は、1951年に118人、1952年に94人で、定数を満たしていなかった。さらに、1951年には人員リストを一部変更した。指導部や研究員に関して、名前や勤務年数、入党歴などの従来の項目に、民族の欄が追加された。16名中、ロシア人が15名、ユダヤ人が1名

84 Wendy Z. Goldman, *Terror and democracy in the age of Stalin : the social dynamics of repression*, (Cambridge : Cambridge University Press, 2007), p. 8.

85 ЦГАИПД СПб, ф. Р-24, оп. 54, д. 518, л. 63.

86 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 28, д. 249, л. 12-13.

87 Государственный мемориальный музей обороны и блокады Ленинграда: путеводитель. С. 2; *Болдовский, Бранденбергер*. Обвинительное заключение «Ленинградского дела». С. 1021.

88 Kirschenbaum, *The legacy of the Siege of Leningrad, 1941-1995*, p. 146. 包囲下で、シCHEDリン図書館の職員は栄養失調に陥りながらも、収集事業を開始して、目録を作成した。pp. 98-100.

であった。ただし、この唯一のユダヤ人 S. Yu. ガリペリンは党员で、法学の教育を受けたことがあり、1951年に博物館で働き始めたばかりであった<sup>(89)</sup>。

「レニングラード事件」の結果、レニングラードの文化施設は職員の民族的出自を以前より注意するようになった<sup>(90)</sup>。しかしながら、ロシア人、ユダヤ人であることが必ずしも職員の去就を定めたわけではなく、党员資格の有無や専門も考慮されていた。つまり、館長に対しては一か月ほどで建前を放棄して、2年前の称賛から一転した評価を下した一方で、業務の遂行に関わる職員の処遇について、当局は実務に即して判断した。博物館に対する批判の中で職員が尋問を受ける場合もあったが、政治闘争を回避する事例も存在したのである。

こうした状況に抗して、展示の再開を目指す動きもあらわれた。まず、職員は、展示内容を変更した。1949年12月に、新館長ドゥビニンは博物館で立案した計画を市党委員会に提出した。計画では、まず、第一部門で、「大社会主義革命」、つまり十月革命の展示を構想した。ここで、革命というテーマは、レニングラードの郷土史ではなく、ソ連の文脈のものであり、包囲とも関係がない。つづいて、第三部門ではスターリングラードの戦い、第四部門ではクルスクの戦いを扱った。第五部門ではノヴゴロドとレニングラード、第六部門では終戦との関連で帝国主義の日本に言及した。すなわち、レニングラード以外での戦いについて、言及を強めたのである。そのうえで、スターリンの役割を最大限に強調した。そして、展示の結論を、「偉大なるスターリンは、我が人民を共産主義の勝利に導く」と設定した<sup>(91)</sup>。

くわえて、閉鎖の理由として挙げられた「建物の老朽化」の問題も、解消が図られた。閉鎖の理由について、展示内容の「欠陥」のほかに、建物の「修理のため」というものがあった。館長ドゥビニンによる1950年の年次報告では、地域から12万3000ルーブルの予算が割り当てられ、大修理が行われた<sup>(92)</sup>。1951年にレニングラード州党委員会書記カジミン宛に、同州党委員会宣伝扇動局専門部局長ミシチェンコは防衛博物館の建物の老朽化を報告した。建物は、1872年に建てられたもので、屋根裏部屋と各階の木造の天井は活性菌、キクイムシ、シバンムシに汚染されており、梁は腐敗していた。修復費用は310万ルーブルで、開館に当

89 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1198, л. 8; ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1384, л. 13.

90 「レニングラード事件」とロシア中心主義との関連については、議論が行われてきた。クズネチェフスキーは、「レニングラード事件」をロシア人エリートに対する抑圧と捉え、それゆえユダヤ人に対して行われた「コスモポリタニズム批判」「医師団陰謀事件」（1953年1月）とは異なり、事件の研究・解明が長らく行われてこなかったという。これに対し、ブランデンバーガーは、戦後スターリン期の党指導部がロシア人特有のイメージを積極的に利用したことは認めつつも、その目的はロシア人の利益ではなく動員の強化にすぎないと述べ、クズネチェフスキーの見方に疑義を呈している。Кузнечевский В.Д. Ленинградское дело. Советские против русских. Сталинский удар по Питерским. М., 2019. С. 19–20; Бранденбергер Д.Л. Сталинский руссоцентризм: советская массовая культура и формирование русского национального самосознания, 1931–1956 гг. 2-е изд. М., 2017. С. 261–274; Амосова А.А., Бранденбергер Д. Новейшие подходы к интерпретации «Ленинградского дела» конца 1940-х – начала 1950-х годов в российских научно-популярных изданиях // Новейшая история России. 2017. № 1. С. 103–105.

91 ЦГАИПД СПб, ф. Р-24, оп. 54, д. 171, л. 30–47.

92 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1198, л. 1, 5, 11.

たつて緊急の修理には 150 万ルーブルが必要であった<sup>(93)</sup>。

1951 年には、革命博物館館長バヴロヴァと党組織書記シュカリルピナが、アンドリアーノフに宛てて、レニングラード防衛博物館を革命博物館の分館に変えることを提案した。この提案は、州党委員会宣伝扇動局長 A. ポポフ、同顧問レベデフが却下した<sup>(94)</sup>。

レニングラードの新たな党指導部の下で、閉鎖は着実に推し進められた。1953 年 2 月 2 日付の閉鎖委員会の会議では、色あせて汚れた写真、崩れた彫刻について検討して、1237 ルーブル相当の写真 153 枚の状態を確認した。備品も、テーブルや電気ケトルなど、減価償却とみなされたのは、196 項目にのぼった。1953 年 1 月 21 日付のロシア共和国閣僚会議令第 239-p 号を受けて、2 月 18 日のレニングラード市ソヴィエト執行委員会の決定第 15-7-6 号で、防衛博物館の所蔵品、資料、アーカイブ、資産などを、レニングラード市歴史博物館、党中央委員会付属マルクス・エンゲルス・レーニン研究所の革命博物館へ引き渡すことが決定された<sup>(95)</sup>。つまり、防衛博物館は、1949 年の臨時閉館という形ではなく、組織として完全に解体された。

このように、党指導部から防衛博物館にくわえられた批判は、レニングラード党指導部とマレンコフの間の政争を背景に、指導者崇拜をめぐる中央と地方の緊張関係や軍に関する展示内容と深く関わっていた。こうして、展示室ではスターリンの指導を軸にした独ソ戦の記念という側面が強調されると同時に、レニングラード包囲に関する展示は全面的かつ強烈な打撃をうけ、損なわれた。

## 4. レニングラード防衛博物館における「記念」の展開

### 4-1. 他の「英雄都市」との交流

ここまで見てきたように、政治的圧力によってレニングラード防衛博物館の展示内容は根本的な修正を蒙った。また、博物館内部での展示活動の余地自体が、狭まっていった。だが、臨時閉館の後で、防衛博物館の職員は当局からの抑圧に展示内容の変更のみで対応したのではなかった。1949 年以降展開された博物館の活動には、党の路線に沿いながらも新たな方向から事業の継続を模索した側面も存在したのである。この側面は、防衛博物館の研究員・職員によって行われた出張事業を検討することで明らかになる。

1948 年には、展示の再編、来館者サービス、研究事業、建設工事といったそれまでの活動にくわえて、出版事業、会議の開催、エクスカージョン事業の強化、新しい展示品の受入れも行われるようになった<sup>(96)</sup>。職員は、展示や来館者サービス以外に活動を広げていた。

93 ЦГАИПД СПб, ф. Р-24, оп. 63, д. 5, л. 7-8.

94 ЦГАИПД СПб, ф. Р-24, оп. 65, д. 75, л. 1-4. 革命博物館は、1945 年に閉鎖されていたが、1950 年に再建された。*Бранденбергер. «Репрессированная» память?* С. 181.

95 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1561, л. 1-2, 19, 24, 32. 1964 年 1 月 27 日、包囲解放 20 周年を記念してレニングラード歴史博物館で包囲に関する常設展が開かれた。グラスノスチのさなかの 1989 年に、レニングラード防衛博物館は、以前と同じ建物に再度開かれた。Maddox, *Saving Stalin's imperial city*, pp. 199-200.

96 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 690, л. 1-5.

1948年11月の時点で、博物館館長コヴァリヨフはレニングラード市執行委員会文化部の会議（議長ラチンスキー）で、レニングラードのみならず、ガッチナ、プスコフ、オデッサなど、他の都市の学者や博物館に多大な支援を提供していることを報告して、博物館の意義を強調した<sup>(97)</sup>。

1950年から1951年にかけて、展示事業の展望がない状況で、科学研究事業の一環として、防衛博物館は、他の都市への出張事業を広く展開した。派遣された研究員は、文書、写真、新聞、ビラ、ポスターを集め、各地域で人的な交流を図った。

第一の派遣先は、モスクワや英雄都市であった。部門長 N. D. フジャコヴァは、ヤロスラヴリ、イヴァノヴォ、ゴーリキーの各都市に出張した。これらの出張は、大祖国戦争期のレニングラードに対して国が与えた支援について資料を集めることを目的としていた。各都市の党アーカイブへの入館許可を事前にとるなど、準備が行われた。モスクワには部門長 E. M. ナジモヴァと Z. A. エーデルスタインが派遣された。ソ連内務省やソ連科学アカデミー歴史研究所、モスクワ市党委員会党史研究所のアーカイブで写真や文書を受けとった<sup>(98)</sup>。

さらに、モスクワへの出張では、独ソ戦に関する資料以外の収集が行われた。エーデルスタインは、革命博物館、レーニン博物館、赤軍博物館、タスなどでの資料収集について報告した。十月革命アーカイブと中央歴史アーカイブでは、目録について話し合い、検討した。海軍博物館では、1919年のペトログラード防衛とスターリンの活動に関する資料を受け取った<sup>(99)</sup>。

英雄都市とも、積極的に交流が行われた<sup>(100)</sup>。レニングラード防衛博物館の職員は、スターリングラード防衛博物館とオデッサ防衛博物館から写真を受けとり、みずからの活動についてこれらの博物館の職員に伝えた<sup>(101)</sup>。1951年1月に、防衛博物館は、スターリングラード、オデッサ、セヴァストポリの研究員と会議を開催することを計画した<sup>(102)</sup>。レニングラードや他の都市の科学研究機関の職員が防衛博物館で働くこともあった。ソヴィエト軍中央博物館館長中佐ヴォストロコフやスターリングラード防衛博物館館長ポドレースノフとの会議も開かれた。会議で、彼らは仕事の経験を共有して助言した<sup>(103)</sup>。

レニングラード防衛博物館にとって、モスクワおよび他の英雄都市との交流は、一方では「レニングラード事件」後の当局の路線に沿ったものであった。とりわけモスクワとの関係では、レニングラードは国家から支援を受ける立場にあったことが強調された。1949年

97 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 692, л. 7.

98 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1198, л. 13-14.

99 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1386, л. 11-12. 1951年1月19日の防衛博物館の研究員の会議の報告による。同じ会議で、ラコフ館長逮捕後のシチェドリノ図書館から、ジダーノフに関する文献目録を受けとったことも報告された。Там же. л. 14.

100 1942年12月22日に、ソ連最高会議幹部令で、包囲戦での功績をたたえるメダル「レニングラード防衛」が、スターリングラード、オデッサ、セヴァストポリの防衛と並んで制定された。1945年5月1日にはこれらの都市は、ソ連最高司令官令で英雄都市の称号を授与された。のちに、1965年5月8日に、ソ連最高会議幹部会が「英雄都市」に関する規定を承認して、称号は正式に国家賞となった。このときには、4都市にくわえて、モスクワとキエフにも「英雄都市」の称号を授けた。Сахаров А.Н., Сенявский А.С. (отв. ред.) Народ и война: 1941-1945 гг. М., 2010. С. 681-683.

101 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1198, л. 14-15.

102 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1386, л. 5.

103 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1384, л. 8-9.

9月26日の市党委員会宣伝扇動部会議で防衛博物館所蔵品長 V. L. アンドリアノヴァは、ある研究員の発言を引用して、レニングラードは「国の全般的なシステムで控えめな地位を占めるべきです」と語った<sup>(104)</sup>。

他方、他の英雄都市との交流は、レニングラード包囲を相対化して、全国的な経験として捉えようとする試みであったが、モスクワとの交流とは異なり、レニングラードが従属的な立場に立つことはなかった。それには、ほかの都市における戦争博物館建設の動向も関係していた。戦後、モスクワの博物館は記念の展示をそれぞれ進めたが、モスクワ防衛博物館の開館は1981年まで待たねばならなかった<sup>(105)</sup>。スターリングラードでは、1918-1920年のツァリツィン（都市の旧名）の戦いを記念した博物館を、疎開からの帰還後、1943年にツァリツィン・スターリングラード防衛博物館という形で再建した。展示は、1948年に開かれた。ママイの丘にある記念碑は、1967年に公開された。スターリングラードの記念碑の建設では、スターリン死後の15年間に、その場しのぎの対応による混乱があったといわれている<sup>(106)</sup>。1940年代後半から1950年代にかけて、レニングラード以外の各都市でも戦争の記念事業において、レニングラードとは異なる困難があったのである。そこで、レニングラード防衛博物館の職員は、「英雄都市」の博物館と対等な立場から交流を積極的に組織することで、互いの知見を交換したのである。この交流の中で、レニングラード防衛博物館の職員は、「英雄都市」という称号にもとづく自らの地位を守ることにもなった。

#### 4-2. 被占領地域の調査

出張事業のもう一つの派遣先は、レニングラード州と近隣の州におけるかつての被占領地域であった。博物館の研究員は、調査の対象となる前線の範囲を拡大して、戦時における各地の状況を解明しようとした<sup>(107)</sup>。彼らは、レニングラード包囲だけではなく、より広範な地域について、戦争の経験を検証すべく、活動の範囲を拡大したのである。1950年3月と6月に、防衛博物館の職員は、ルーガ博物館へ出張して、防衛博物館の展示を計画した。タリン、リガ、ペトロザヴォーツク、プスコフ、ロデーイノエ・ポレへの出張では、研究員が、写真とパンフレットなどを受けとった。エストニア、ラトヴィア、リトアニア、カレロ＝フィン、各ソヴィエト共和国の科学アカデミーの歴史博物館、プスコフ、ノヴゴロド、カリーニンの各州の郷土史博物館、「スヴィールの勝利」博物館には、資料の照会が行われた<sup>(108)</sup>。1951年には、レニングラード、プスコフ、ノヴゴロド各州への出張が行われた。南西のノヴゴロド方面、東はペトロクレポスチ、西はエストニアの国境付近、ナルヴァまで、研究員が派遣さ

104 ЦГАИПД СПб, ф. Р-25, оп. 28, д. 352, л. 6-7.

105 МОСКВА // *Янин*. Российская музейная энциклопедия : В 2 т. Т. 1. С. 374-375: ОБОРОНЫ МОСКВЫ МУЗЕЙ // Т. 2. С. 40.

106 Palmer, "How Memory Was Made," pp. 377-378; "СТАЛИНГРАДСКАЯ БИТВА" // *Янин*. Российская музейная энциклопедия : В 2 т. Т. 2. С. 207.

107 1949年の包囲解放記念祭では、防衛博物館の新しいホールへの訪問と並んで、人々は前線の跡地を訪問したと報じられた。Ленинград праздничный // Ленинградская правда. 28. 01. 1949. С. 2. 新しいホールについても報じられた。В Музее обороны Ленинграда // Красная звезда. 27. 01. 1949. С. 2.

108 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1386, л. 13, 32-36.

れた<sup>(109)</sup>。デミャンスク、ペトロザヴォーツク、チフヴィンにも出張した。ソ連の連邦構成共和国と、プリモルスキー地方など遠方の州の党アーカイブと新聞の編集部からも、資料を受けとった<sup>(110)</sup>。

これらの出張事業において特筆すべきであるのは、プスコフ、オストロフへの出張である。プスコフ、オストロフには、パルチザン部門長コンスタンチン・D. カリツキーが派遣され、コムソモール組織のパルチザン活動の史料と写真を受けとった<sup>(111)</sup>。

カリツキーは、1913年生まれで、戦前はドネツクの冶金工場で炉前工の見習いとして働いていた。1932年から軍属となり、戦時中はレニングラードのパルチザン部隊を指導した。カリツキーは1944年にソ連邦英雄の称号を授与された<sup>(112)</sup>。カリツキーは1947年から防衛博物館で働き、1948年の展示事業ではパルチザン部門長としてピオネールと面会していた<sup>(113)</sup>。

出張において、カリツキーは、まず、プスコフに到着して、『プスコフスカヤ・プラウダ』紙の編集部員から、戦死したパルチザンであるクラウディヤ・ナザロワに関する2冊の本を受け取った。つぎに、オストロフに向かい、ナザロワの母親に会った。カリツキーは、ナザロワの写真、ナザロワにソ連邦英雄の称号を授与する証書、彼女に関する詩のテキストをレニングラードに持ち帰った。ナザロワに関する資料の他には、地下のコムソモール組織の成員の名簿や、活動に関するいくつかの新聞記事、パルチザンのミラ・フィリッポワの写真も集めた。フィリッポワの写真の裏には、彼女が当時5歳の娘に宛てて記した別れの言葉が読める。この出張に関するカリツキーの報告に対して、ドゥビニンは「同志カリツキーの出張の成果は格別に貴重なものと認めなければならないでしょう」と評価した<sup>(114)</sup>。

カリツキーが集めた資料はどのようなものであったのか。クラウディヤ・ナザロワは、1920年10月にオストロフのロシア人農民の家に生まれた。レニングラード体育大学を卒業後、縫製作業所のピオネール班長をつとめていた。1941年、ナザロワはほかのパルチザンとともに、オストロフで地下コムソモール組織を設立して指導した。パルチザン活動では、住民に占領者への抵抗を呼びかけるビラを配り、武器や弾薬を集めた。50人以上の負傷した捕虜を救い、パルチザン分隊に貴重な偵察資料や武器を提供した。彼女は1942年11月にナチスに逮捕され、同年12月に処刑された<sup>(115)</sup>。

リュドミラ(ミラ)・フィリッポワもオストロフ出身のコムソモール員であった。戦前まで沿バルト地方にあるサーレマー島の軍団の一つで働いていたが、戦争が始まると、娘とともに故郷のオストロフに戻った。フィリッポワは、ナザロワの死後、パルチザン組織を率いた。そして、1943年8月に逮捕され、9月に銃殺された<sup>(116)</sup>。

109 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1384, л. 2.

110 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1198, л. 14-15.

111 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1198, л. 14.

112 Карицкий Константин Днионисевич // Мелу А.И. Блокада Ленинграда. Энциклопедия. М., СПб., 1999. С. 223.

113 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 690, л. 3; ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1198, л. 8.

114 ЦГАЛИ СПб, ф. Р-277, оп. 1, д. 1386, л. 8-9.

115 НАЗАРОВА Клавдия Ивановна // Шкадов И.Н. (ред.) Герои Советского Союза: краткий биографический словарь. Т. 2. М., 1988. С. 139.

116 НАДПИСИ КОМСОМОЛКИ-ПОДПОЛЬЩИЦЫ Л. ФИЛИППОВОЙ // Кондратьев В.А.

ナザロワとフィリッポワには、パルチザンとして典型的な面と、そうでない面があった。1942年9月に、スターリンが国防人民委員命令第189号で「パルチザン運動を全人民の運動としなければならない」とした<sup>(117)</sup>。ナザロワが逮捕された時期を考慮すると、オストロフでの活動もまた、こうした全ソ的なパルチザン運動の傾向と軌を一にしていたと考えられる。

レニングラードを含むロシア北西部は、ユダヤ人がほとんどいなかったという点で、他の前線地域と異なっていた。パルチザン運動の参加者は、元々の住民構成を反映して、圧倒的多数がロシア人であった。他方、ジェンダー・年齢の面では、若年層や女性の数は、公的な統計より多かったことを留意しなければならないものの、パルチザンの9割近くが男性で、89.3%が18歳から45歳までであった<sup>(118)</sup>。ナザロワとフィリッポワは、ロシア人であるという点ではこの地域のパルチザンの典型であったが、女性という点では、それほど代表性があったわけではない。つまり、あえて女性を顕彰対象に選んだと考えられるのである。女性パルチザンの戦闘参加について、国家は全ソ的に、既存のジェンダー規範や男性パルチザンの顕彰との折衝において記念していたが、ロシア北西部でも同様の取り組みがあったことが窺える<sup>(119)</sup>。それにくわえて、ここでは、同様にパルチザン運動に参加したといえども、軍属の男性であったカリツキーが、コムソモールの女性の活動の解明に取り組んだという点で、ジェンダー面での対比もみいだせる。

パルチザンの顕彰は、戦後直後から始まっていたが、本格化したのは1950年代後半である。死後、ナザロワにはソ連邦英雄称号が、フィリッポワには祖国戦争勲章第一等が授与された。各地の街路に、ナザロワの名前が冠された<sup>(120)</sup>。1959年に、プスコフのコムソモール員が、不明だったフィリッポワの遺骨を見つけた。そして、1960年に、ナザロワの写真やフィリッポワの写真を、ジャーナリストのN. ドブロトヴァルスキーが、レニングラード歴史博物館で発見したのである<sup>(121)</sup>。

これらの資料は、戦死したパルチザンの家族が保管していたものであり、彼女たちの母親の所持品や娘宛の遺品であった。そして、防衛博物館の解体時に、レニングラード市歴史博物館に移管されたと推測できる。

その後、フィリッポワの写真は、独ソ戦期の英雄をテーマとした資料集に収められた。資料

---

*Политов З.Н. (сост.)* Говорят погибшие герои: Предсмертные письма советских борцов против немецко-фашистских захватчиков (1941–1945 гг.). 8-е изд., доп. М., 1986. С. 267–268.

117 Roger D. Markwick, Euridice Charon Cardona, *Soviet Women on the Frontline in the Second World War*, (New York: Palgrave Macmillan, 2012), p. 131.

118 Alexander Hill, *The war behind the Eastern Front: the Soviet partisans in North-West Russia, 1941–1944*, (London: Frank Cass, 2005), pp. 173–175.

119 パルチザンの女性の顕彰については以下を参照。Markwick, Cardona, *Soviet Women on the Frontline in the Second World War*, pp. 117–148. 前線で戦った女性については、以下も参照。Anna Krylova, *Soviet women in combat: a history of violence on the Eastern Front*, (New York: Cambridge University Press, 2010), pp. 219–222.

120 НАЗАРОВА Клавдия Ивановна // *Шкадов*. Герои Советского Союза. Т. 2. С. 139; НАДПИСИ КОМСОМОЛКИ-ПОДПОЛЬЩИЦЫ Л. ФИЛИППОВОЙ // *Кондратьев*. Политов. Говорят погибшие герои. С. 271.

121 *Филимонов А.В.* Подпольная организация города Острова: изучение, история, память // Псков. Научно-практический, историко-краеведческий журнал 40. 2014. С. 33–35.

集には、列車の衝突事故や各地での爆破事件など敵に抗戦するパルチザン活動の詳細とともに、写真の裏に書かれた娘宛のメッセージが、フィリッポワがナチスに逮捕された後、尋問の一環で娘に会うという切迫した事態の中で記されたものであると、資料の経緯も記載した<sup>(122)</sup>。

カリツキーが出張する以前に、パルチザンの関係者とは、すでに『プスコフスカヤ・プラウダ』紙や『コムソモーリスカヤ・プラウダ』紙の特派員が接触し、記事を掲載していた<sup>(123)</sup>。しかし、1950年から1951年にかけて、これらの資料は家族から防衛博物館に渡り、博物館の解体とともに散逸せず、他の博物館に受け継がれた。このことは、女性パルチザンを「英雄」として称揚する過程における、資料保存という初期の重要な分岐点であったと考えられる。

こうして、防衛博物館の職員は、包囲戦にとどまらない、同市を中心としたロシア北西部の戦時の状況を明らかにするとともに、女性パルチザンの顕彰に関して、資料収集の面で大きく貢献した。前述の通り、少なくとも当局の見解では戦時のパルチザン運動はスターリンがパルチザンに対して出した指令に基づいていたため、その解明の取り組みは記念事業に関する党の路線に反していなかった。被占領地域へ出張活動は、ソ連市民のドイツ軍への広範な抵抗という、公式の歴史像に合致するものであった。

しかし、それにくわえて、職員の出張に関する記録は、パルチザンの母親や娘が遺品を保存していたことや、地方紙が彼女たちと接触していたことが、資料の収集につながったという一連の経緯も示している。こうして、収蔵品を中心に、様々な戦時の経験が明らかにされた。防衛博物館の職員の活動は、単に党中央の見解をなぞるだけでも包囲の経験に限定することもなく、近隣の被占領地域の戦争の記憶も収集することで、レニングラードを中心とした地域の記憶を維持するという独自の役割も果たしたといえるのである。

## おわりに

レニングラード博物館は、前身となる展覧会の開催以来、展示事業を中心に包囲の記念に取り組んだ。先行研究も明らかにしているように、厳しい包囲および復興の中で、国や地方当局、人々は、それぞれの方法で戦争の経験を保存してきた。開館当初、防衛博物館の職員は、レニングラードという一都市の戦争体験を市民に説明するために、展示を組織した。来館者事業において展示の主な対象は来賓と市民であり、とりわけ勤労者と軍人が重視された。

1948年以降党中央からレニングラードにくわえられた抑圧は、党組織では指導者層の人事にあらわれたが、博物館では人事のみならず展示室や館内の収蔵品を主な対象としていた。こうしたモスクワからの圧力に対して、防衛博物館やレニングラードの党組織の職員は、党のイデオロギーに沿って展示の内容を改変し、レニングラード独自の経験に関する展示を退け、レニングラード以外のスターリンの役割を強調するようになった。

展示に対する抑圧を受けて、博物館の職員は、博物館の閉館から解体までの期間に、市民

122 НАДПИСИ КОМСОМОЛКИ-ПОДПОЛЬЩИЦЫ Л. ФИЛИППОВОЙ // Кондратьев. Политов. Говорят погибшие герои. С. 267–270.

123 Фильмонов. Подпольная организация города Острова. С. 24.

を対象とした来館者事業から展示室の外に事業の活路を開くことになった。職員は、レニングラードに授与された「英雄都市」という称号にもとづいてほかの都市の博物館と交流した。さらに、市街だけでなく、レニングラード戦線以外の北西ロシアの被占領地域においても、戦時のパルチザン活動について調査した。職員は、各都市を訪れて文書や遺品を持ち帰り、所蔵品として博物館に収めた。この事業は、パルチザンの顕彰という点で党の路線に反するものではなく、前線地域の戦時の状況を解明することに寄与するとともに、ロシア北西部における独ソ戦の記憶の蒐集という点でレニングラードの求心力を構築することにつながった。

ここで、記念事業の担い手となった博物館の職員についてさらなる検討を行うならば、彼らの活動がもたらした成果は、展示品・収蔵品の存在と、その扱いをめぐる生じた人的交流を考慮して捉える必要がある。防衛博物館の職員が出張するにあたって、旧前線地域の新聞社や地域の文書館、住民の協力は必要であった。各地の関係者の協力によって、防衛博物館の職員は展示の組織者としてだけでなく、来館者が得たような収蔵品との邂逅の経験を持つことになった。収蔵品が個人の手元を離れて博物館に収められた結果、博物館の職員は、市街にとどまらず前線地域においても広く過去の検証に取り組み、戦争の体験を集約することができた。そして、「英雄」という称号をめぐる、一面的な勇敢さだけではない複雑な記憶の存在を浮き彫りにした。博物館の職員は、レニングラードという一都市を中心に、より広範な地域を対象として、様々な人々による戦争の記憶のあり方を統合する役割を担い続けたといえるのである。

## **Preserving War Memory in the Late Stalinist Period: The Case of the Museum of the Defense of Leningrad**

**MATSUMOTO Yukiko**

In 1944, the exhibition “Heroic Defense of Leningrad” opened in Leningrad, displaying the tremendous damage inflicted upon the city during the German army’s siege. The exhibition turned into the Museum of the Defense of Leningrad on 27 January 1946, the second anniversary of the end of the siege. Yet Moscow’s oppression of the Leningrad party leadership reached the museum, which was forced to close its exhibition in 1949 and completely dissolve in 1953. This article examines how the museum workers reacted to this pressure of Moscow’s against Leningrad’s own commemoration of World War II.

Previous studies have also addressed tensions between the local dimension of memory-making concerning the siege and the central party’s intervention. While they tend to assume the central party’s substantial impact on the local situation, people in Leningrad did not simply accept instructions from above: coping with criticism from the state, they managed to expand the scope of local commemoration. Meanwhile, studies of war museums in general have focused on museum operators, such as the state and local authorities, in illustrating how the museum staff organized exhibition projects. We know how the war museum workers, for example in Moscow and Minsk, developed new aspects of commemoration keeping close contact with the local people. Using this museological approach, I reveal specific features of war commemoration in Leningrad in the late 1940s and 1950s, where the state, local authorities, and visitors had divisive, competing, and conflicting understandings of wartime experiences. It was the museum staff who played a significant role in coordinating and integrating these diverse experiences. To capture the whole picture of the museum’s commemorative projects, I focus particularly on its staff’s activities outside the museum, which have not been adequately analyzed in previous studies.

Sections 1 and 2 analyze the exhibits and visitors in the Museum of the Defense of Leningrad. On 27 January 1944, Leningrad was completely liberated from the siege. The organizers of the museum, as well as its precedent exhibitions, initially intended to exhibit the situation on the front lines and in the rear of Leningrad during the war. As the museum records show, the vast majority of the visitors were residents of Leningrad, which accounts for the exhibition designed to enlighten them with the most basic information. The museum demonstrating the sufferings and achievements of the Soviet citizens was also an important destination for many groups of workers and young people from Eastern European countries, as well as British and American personnel.

Section 3 addresses the impact of the “Leningrad Affair.” In August 1948, when Zhdanov, the leader of Leningrad, died, his rivals, Malenkov and Beria, expanded their power over the party’s Central Committee in Moscow. As the political changes progressed in the summer of 1949, the Museum of the Defense of Leningrad was attacked by two severe criticisms concerning the production and installation of local leaders’ portraits and the display of weapons. These criticisms by the central party clearly revealed the

tensions between the state and the locals revolving around the cult of the leader and the military exhibits. In response to political pressure from Moscow, the museum staff and the Leningrad party organization tried to preserve the museum by taking all possible measures in tune with official propaganda. As a result, the exhibition on the siege of Leningrad was drastically diminished, with all exhibition halls dedicated to the central role of Stalin's leadership in the whole "Great Patriotic War."

Section 4 describes official trip projects undertaken by the researchers and staff of the Museum of the Defense of Leningrad after the closure of its exhibition. In Moscow, they investigated materials concerning the state's support to Leningrad during the war. It shows that they placed Leningrad in a "modest position" in relation to Moscow, despite its significance as the second-largest city with a unique historical identity. Simultaneously, the museum staff took advantage of Leningrad's title of "Hero City" to play an active role in organizing some meetings across a variety of regional museums and in collaborating with many museums in other heroic cities. Thus, the official trip was an attempt to integrate the memory of the Leningrad defense into an all-Soviet commemoration.

Another destination of the trip was the wartime occupied areas. The museum staff expanded their scope of research to uncover circumstances of several frontline areas that had not been fully investigated due to severe wartime devastation. In Pskov and Ostrov, cities located in Northwestern Russia, museum researchers collected some photographs and documents related to partisans in the occupied territories. These photographs were handed over to the museum staff by the surviving families of the female partisans and the Komsomol members. These trip activities contributed to turning these partisans into heroines. Although political repression forced the museum staff to transfer its repository of materials to other museums and institutions, they managed to keep the collected photographs intact. Ten years later, they could adapt to the official glorification of the partisan movement in the 1960s by discovering and using the collected documents.

This article illustrates the important role the staff of the Museum of the Defense of Leningrad played in maintaining the memory of Leningrad and in collecting war memories in neighboring occupied areas. The collection of items leaving individuals' hands to be housed in the storage of the museum enabled the museum staff to examine the past of the city and other frontline areas and to integrate diverse war experiences and narratives. In so doing, the museum staff could also highlight ambiguity in memories surrounding the title of "hero/heroine," which is never narrowly confined to bravery.